

## 総 則

### 1 平成17年度高等学校教育課程実施状況調査の概要

#### (1) 調査の概要

高等学校学習指導要領（平成11年告示）に基づく教育課程の実施状況について、学習指導要領における各教科、科目の目標や内容に照らした学習の実現状況を把握し、指導上の課題を明らかにして、教育課程の基準や指導方法の改善に資することを目的として、高校3年生を対象に無作為抽出によって、平成17年11月10日に実施したものである。

調査内容は、国語、地理歴史、公民、数学、理科、外国語の6教科12科目による生徒を対象としたペーパーテストによる調査と、教師を対象とした質問紙による調査及び生徒を対象とした質問紙による調査の3種類である。

生徒を対象としたペーパーテストによる調査においては、学習指導要領の内容領域、評価の観点等を考慮した調査問題を出題し、個々の問題ごとにあらかじめ「設定通過率」を定め、設定通過率と通過率（※1）を比較するとともに、前回調査（平成14・15年度）と同一問題も出題し、今回と前回の相互の通過率を比較できるようにした。（表1参照）

なお、学習指導要領に定める幅広い内容にわたる実現状況を調べるため、各科目ともほぼ同程度の内容、水準のA、B2種類の調査票を作成した。

また、生徒及び教師を対象とした質問紙による調査においては、全員が回答する共通部分と、その教科・科目の調査問題を課せられた生徒（教師）のみが回答する教科・科目部分で構成した。（表1参照）

（※1）設定通過率は、学習指導要領に示された内容について、標準的な時間をかけ、適切な学習活動が行われた場合、個々の問題ごとに、正答、準正答を解答した生徒の割合である通過率が、どの程度になるかを予想し、設定した数値(%)である。設定通過率との比較では、5%までの差は同程度と判断している。

**表1 ペーパーテスト調査問題数及び生徒質問紙調査**

教科・科目		全問題数 (A、B冊子合計)	全問題のうち 記述式問題数	全問題のうち前 回と同一問題数	生徒質問紙	
国語	国語総合	47	9	10	[共通部分] ① 勉強（全般）に対する意識 ② 学校の授業（全般）の理解、 学習習慣、生活習慣等 [科目部分] ① 当該科目の履修学年、入学試験等の対象の有無 ② 当該科目の勉強に対する意識 ③ 当該科目の授業の理解、学習活動等 ④ 内容領域に対する意識	
地理 歴史	世界史B	67	14	14		
	日本史B	60	17	18		
	地理B	60	10	11		
公民	倫理	45	10	10		
	政治・経済	44	17	15		
数学	数学I	36	10	11		
理科	物理I	57	12	14		
	化学I	60	13	21		
	生物I	66	16	19		
	地学I	63	21	17		
外国語	英語I	52	14	21		
合計		657	163 (24.8%)	181 (27.5%)		

(2) 調査結果の特色

ア 前回調査との同一問題との比較の概要

12科目中、世界史B、地理B、政治・経済、物理I、化学I及び英語Iの6科目において前回は有意に上回る問題数が有意に下回る問題数よりも多く、国語総合及び生物Iの2科目において、前回は有意に上回る問題数が有意に下回る問題数よりも少なかった。また、日本史B、倫理、数学I及び地学Iの4科目は、すべて前回と有意に差がなかった。

また、前回調査と同一問題の記述式問題では、科目で無解答率平均に差はあるものの、依然として合計の無解答率が約25%と高い水準にあった。(表2参照)

**表2 前回調査との同一問題の比較**

教科・科目		全問題数	同一問題数	前回の問題数との比較			記述式問題数	通過率平均		無解答率平均	
				上回る	差がない	下回る		前回	今回	前回	今回
国語	国語総合	47	10	1	4	5	1	41.3	35.5	36.8	44.8
地理歴史	世界史B	67	14	2	12	0	4	36.7	40.7	30.0	32.5
	日本史B	60	18	0	18	0	6	57.9	55.1	17.2	20.3
	地理B	60	11	6	5	0	0	—	—	—	—
公民	倫理	45	10	0	10	0	3	67.9	66.5	15.9	22.1
	政治・経済	44	15	2	13	0	0	—	—	—	—
数学	数学I	36	11	0	11	0	2	27.5	28.3	52.1	52.1
理科	物理I	57	14	1	13	0	2	56.7	62.2	15.2	12.8
	化学I	60	21	8	12	1	5	39.2	47.3	27.7	21.7
	生物I	66	19	2	14	3	5	39.4	40.0	24.2	24.1
	地学I	63	17	0	17	0	4	44.2	42.7	29.7	28.4
外国語	英語I	52	21	4	16	1	6	47.9	47.6	23.0	20.7
合計		657	181	26	145	10	38	46.4	47.4	25.2	25.3

イ ペーパーテストの調査結果の主な特色

12科目中、国語総合、世界史B、日本史B、地理B、倫理、化学I、生物I、地学I及び英語Iの9科目において通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題数が全体の問題数の半数以上を占めた。また、生物Iは設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題数が半数であった。一方、政治・経済、数学I、物理Iの3科目は、通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題数が全体の問題数の半数未満であった。(表3参照)

**表3 設定通過率との比較**

教科・科目		全問題数	設定通過率との比較			教科・科目		全問題数	設定通過率との比較		
			上回る	同程度	下回る				上回る	同程度	下回る
国語	国語総合	47	23	12	12	理科	物理I	57	12	16	29
地理歴史	世界史B	67	24	26	17		化学I	60	13	18	29
	日本史B	60	26	18	16		生物I	66	12	21	33
	地理B	60	36	15	9		地学I	63	18	14	31
公民	倫理	45	16	15	14	外国語	英語I	52	14	16	22
	政治・経済	44	9	8	27	合計	657	206	187	264	
数学	数学I	36	3	8	25			31.4%	28.5%	40.2%	

評価の観点別の設定通過率を比較すると、「関心・意欲・態度」においては、世界史B、日本史B、地理B、倫理、化学Iの5科目において、有意に上回る問題数が有意に下回る問題数よりも多く、特に、地理Bにおいて顕著であるが、国語総合、政治・経済、数学I、物理I、生物I、地学I、英語Iにおいて、有意に上回る問題数が有意に下回る問題数よりも少なく、特に、政治・経済、数学Iにおいて顕著であった。

また、「知識・理解」においては、国語総合、世界史B、日本史B、地理B、倫理の5科目において、有意に上回る問題数が有意に下回る問題数よりも多く、特に、国語総合、地理Bにおいて顕著であるが、政治・経済、数学I、物理I、化学I、生物I、地学Iの6科目において、有意に上回る問題数が有意に下回る問題数よりも少なく、特に、数学I、物理I、化学I、生物I、地学Iの5科目において顕著であった。

(表4参照)

教科・科目		問題数	「関心・意欲・態度」 設定通過率との比較			問題数	「知識・理解」 設定通過率との比較		
			上回る	同程度	下回る		上回る	同程度	下回る
国語	国語総合	8	1	5	2	23	13	3	7
地理 歴史	世界史B	25	9	9	7	32	10	14	8
	日本史B	10	6	2	2	20	8	6	6
	地理B	13	10	2	1	19	10	6	3
公民	倫理	8	3	3	2	22	8	7	7
	政治・経済	11	1	3	7	14	4	1	9
数学	数学I	11	0	1	10	12	0	4	8
理科	物理I	14	3	4	7	27	4	10	13
	化学I	14	7	2	5	30	6	10	14
	生物I	9	2	2	5	25	2	4	19
	地学I	21	7	3	11	26	9	2	15
外国語	英語I	2	0	0	2	14	4	6	4

#### ウ 生徒の質問紙調査結果の主な特色

##### 【学習に対する意識】

##### (ア) 勉強が好きだ、勉強は大切だ

「勉強が好きだ」に対して「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせると、肯定的に回答した生徒は約2割強であるが、「勉強は大切だ」に対して「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせると、肯定的に回答した生徒は8割以上であり、「勉強は大切だ」と回答した割合が高い傾向にある。「勉強が好きだ」、「勉強は大切だ」ともに、回答した生徒の割合は前回調査と比べ増加傾向にあるが、「勉強が好きだ」と思わない割合も4割以上ある。(表5-1及び6-1参照)

小・中学校の児童生徒の意識と比較すると、小学校5年生、小学校6年生で「勉強が好きだ」と回答した割合が約4割あるが、中学校から高校については2割強であり、小学校、中学校、高校と進むにつれ、「勉強が好きだ」と回答する割合が減少傾向にある。反面、「勉強は大切だ」と回答している割合は、小学校、中学校、高校ともに8割以上の回答率となっている。(表5-2及び6-2参照)

**【勉強が好きだ】**

**表 5-1 平成17年度高等学校教育課程実施状況調査**

区 分	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わな い	分からな い	無回答
平成17年度	5.0	17.1	30.3	42.0	5.2	0.4
平成15年度	4.2	15.7	29.4	44.3	5.9	0.4
平成14年度	4.6	15.4	29.7	43.8	6.0	0.4

**表 5-2 平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査**

区 分	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わな い	分からな い	無回答
中学3年生	4.1	15.7	32.6	40.8	6.4	0.3
中学2年生	3.1	14.8	33.4	42.0	6.4	0.3
中学1年生	3.7	18.3	34.4	36.0	7.2	0.3
小学6年生	8.5	31.3	32.5	19.7	7.6	0.3
小学5年生	11.3	34.0	28.5	17.9	7.8	0.4

**【勉強は大切だ】**

**表 6-1 平成17年度高等学校教育課程実施状況調査**

区 分	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わな い	分からな い	無回答
平成17年度	43.1	41.1	7.1	5.1	2.9	0.6
平成15年度	39.5	41.2	8.3	6.6	3.8	0.5
平成14年度	37.9	41.1	9.2	7.2	4.0	0.5

**表 6-2 平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査**

区 分	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わな い	分からな い	無回答
中学3年生	45.2	39.4	6.9	4.5	3.1	0.9
中学2年生	45.1	39.1	6.8	4.7	3.3	1.0
中学1年生	48.1	37.2	6.3	4.0	3.1	1.3
小学6年生	58.1	30.9	4.4	2.3	2.2	2.1
小学5年生	60.0	27.7	4.6	2.7	2.4	2.5

(イ) 当該科目の勉強が好きだ、大切だ

当該科目の勉強について個別に質問した場合、「当該科目の勉強が好きだ」、「大切だ」と回答した生徒割合は前回調査に比べ増加傾向にあり、肯定的に回答した生徒の得点は高い傾向にある。また、国語総合、日本史B、地理B、政治・経済及び英語Iは、「入学試験や就職試験に関係なくても大切だ」と回答した割合が高い傾向にあり、回答状況とペーパーテスト結果を比較すると、「入学試験や就職試験に関係なくても大切だ」と回答した生徒の得点が高い傾向にある。

**【授業の理解】**

「授業がよく分かる」、「だいたい分かる」の合計が約4割であり、前回調査と比べ増加傾向にある。小・中学校の児童生徒の意識と比較すると、小学校、中学校、高等学校と進むにつれ、「授業がよく分かる」、「だいたい分かる」の割合が減少傾向にある。(表7-1及び表7-2参照)

**【学校の授業がどの程度分かりますか】**

**表7-1 平成17年度高等学校教育課程実施状況調査**

区分	よく分かる	だいたい分かる	分かることと分からないことが半分以上ある	分からないことが多い	ほとんど分からない	無回答
平成17年度	4.3	37.0	39.9	14.2	3.6	0.9
平成15年度	3.7	34.3	40.5	15.5	4.1	1.8
平成14年度	4.2	35.3	40.2	15.4	4.3	0.7

**表7-2 平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査**

区分	よく分かる	だいたい分かる	分かることと分からないことが半分以上ある	分からないことが多い	ほとんど分からない	無回答
中学3年生	8.8	40.6	35.6	11.0	2.7	1.2
中学2年生	6.1	37.3	38.2	13.4	3.3	1.6
中学1年生	7.1	41.0	37.2	10.7	2.3	1.6
小学6年生	18.0	48.0	27.3	4.2	0.9	1.5
小学5年生	18.2	45.4	28.7	4.5	1.0	2.0

**【家庭での学習】**

平日における学校の授業以外の学習時間（塾等の勉強時間を含む）については、「全く、または、ほとんどしない」生徒の割合は、前回調査と比べ減少傾向にある。一方、3時間以上勉強する生徒の割合は、前回調査と比べ増加傾向にある。

小・中学校の児童生徒の意識と比較すると、高等学校で「全く、または、ほとんどしない」生徒の割合が約4割であり、小学校や中学校で「全く、または、ほとんどしない」生徒の割合に比べ激増している。（表8-1及び表8-2参照）

**【学校の授業時間以外に、1日にだいたいどのくらい勉強しますか】**

**表8-1 平成17年度高等学校教育課程実施状況調査**

区分	全く、または、ほとんどしない	30分より少ない	30分以上、1時間より少ない	1時間以上、2時間より少ない	2時間以上、3時間より少ない	3時間以上	無回答
平成17年度	39.3	8.2	7.6	9.8	10.8	23.9	0.3
平成15年度	40.8	8.0	7.7	10.1	11.0	21.8	0.6
平成14年度	41.0	7.6	7.4	9.8	11.0	22.6	0.5

**表8-2 平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査**

区分	全く、または、ほとんどしない	30分より少ない	30分以上、1時間より少ない	1時間以上、2時間より少ない	2時間以上、3時間より少ない	3時間以上	無回答
中学3年生	7.9	5.5	10.0	23.3	27.8	24.9	0.4
中学2年生	15.7	11.9	18.8	29.9	17.9	5.0	0.5
中学1年生	13.1	12.1	20.5	30.3	17.7	5.6	0.5
小学6年生	9.2	15.6	28.4	28.6	11.1	6.1	0.7
小学5年生	9.1	17.3	30.3	24.7	10.1	7.0	1.0

**エ 教師の質問紙調査結果の主な特色**

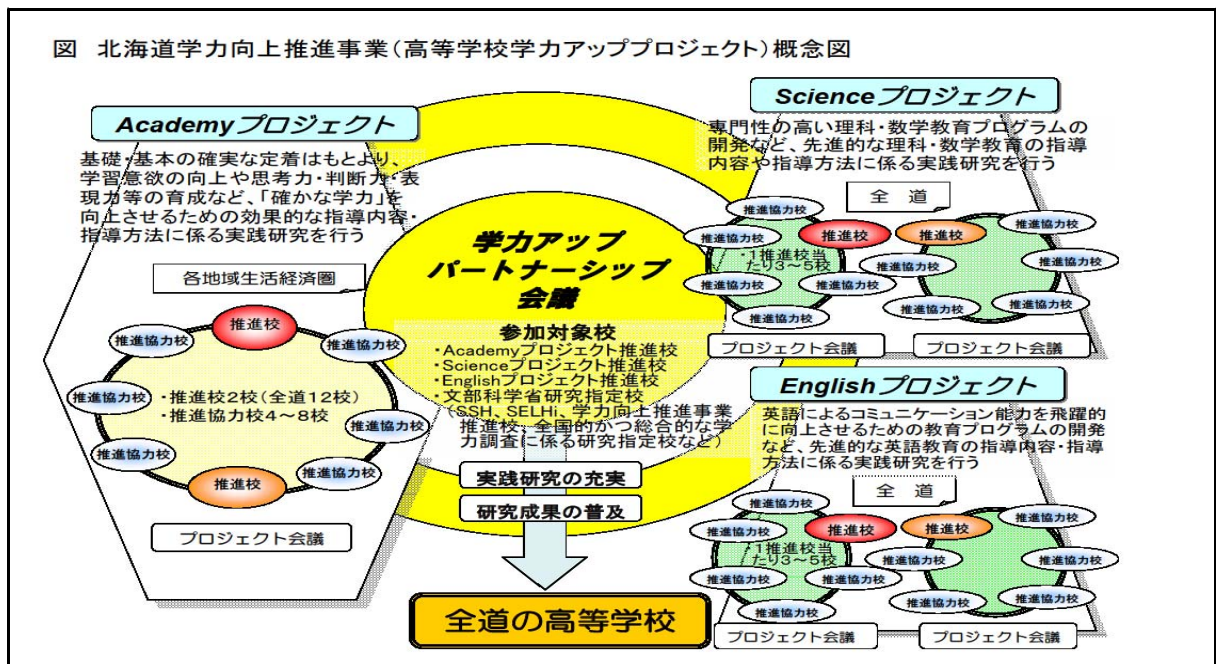
発展的な課題を取り入れた授業や、理解が不十分な生徒に対する補充指導などについては、前回調査と比べ増加傾向にある。このことは、生徒が授業が「よく分かる」、「だいたい分かる」の合計が前回調査と比べ増加傾向にあることと整合性を持つ結果となった。

## 2 確かな学力の育成

### (1) 「高等学校学力アッププロジェクト」の概要

北海道教育委員会では、国及び北海道の学習状況調査等の結果で明らかになった課題を踏まえ、基礎・基本の確実な定着をはじめ、生徒の学習意欲の向上と学習習慣の育成、読解力や表現力等の向上など、「確かな学力の育成」を図るため、平成18年度から平成20年度までの3年間の計画で、「北海道学力向上推進事業（高等学校学力アッププロジェクト）」に取り組んでいる。

本事業では、「確かな学力」を育成するための実践的な研究に積極的に取り組む道立高等学校を推進校・推進協力校として64校指定しており、各学校が行う研究を支援するとともに、研究の成果を全道に広く普及することにより、本道の高校生の学力向上を図ることとしている。



#### <Academyプロジェクト>

圏域	推進校	推進協力校
道央	札幌丘珠 苫小牧東	札幌東 札幌稲北 札幌拓北 小樽桜陽 倶知安 伊達緑丘 苫小牧南 岩見沢東 静内
道南	函館中部 函館稜北	七飯 檜山北
道北	旭川東 稚内	旭川凌雲 富良野 名寄 士別 枝幸 留萌
オホーツク	網走向陽 北見柏陽	網走南ヶ丘 遠軽 湧別 興部
十勝	帯広三条 芽室	帯広緑陽 広尾 音更 本別 鹿追
釧路・根室	釧路明輝 根室	釧路東 白糠 中標津

#### <Scienceプロジェクト>

推進校	推進協力校
札幌啓成 旭川西	札幌北 札幌西 北広島 室蘭栄 滝川 帯広柏葉 江差 釧路湖陵 北見北斗

#### <Englishプロジェクト>

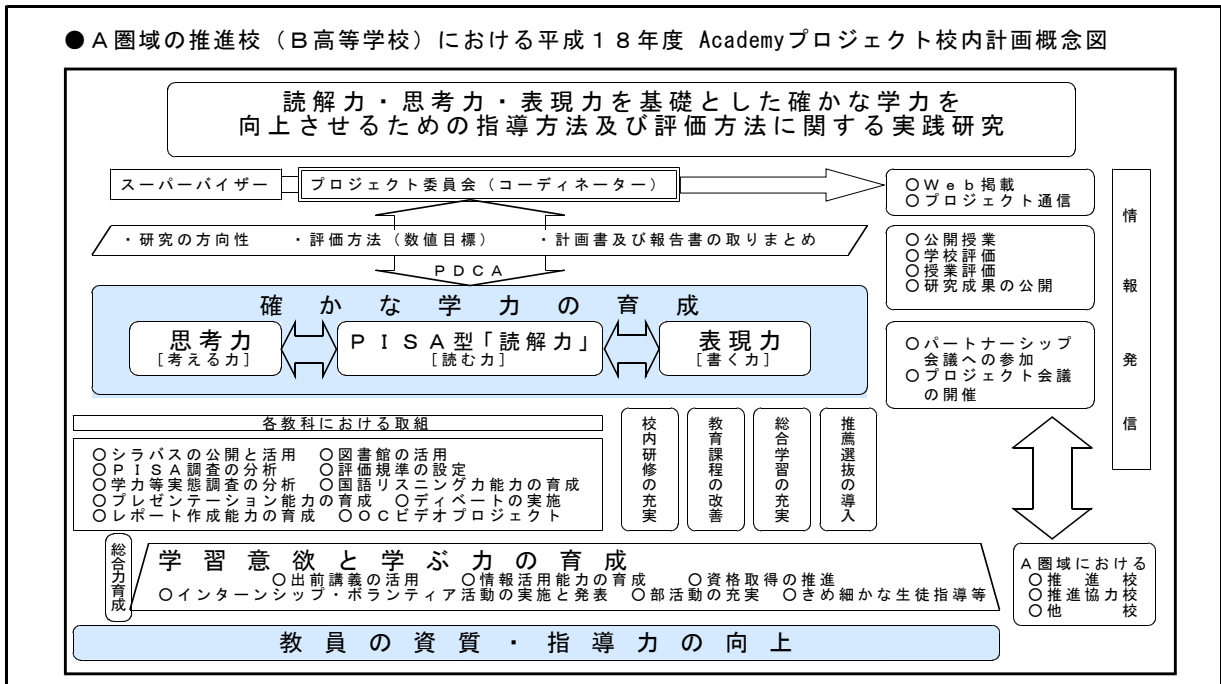
推進校	推進協力校
札幌国際情報 旭川北	千歳 野幌 小樽潮陵 砂川 室蘭清水丘 浦河 函館西 池田 釧路江南 北見緑陵

### (2) 各プロジェクトにおける実践等

#### ア Academyプロジェクト

次の図は、学校全体を活性化させながら学力の向上を図っていくことを目指した校内計画の概念を示したものである。本校においては、読解力・思考力・表現力を基礎とした確かな学力を育成するためには、授業の工夫改善や教育課程の見直し、評価方法に関する実践研究に取り組むとともに、生徒が主体的に学ぼうとする意欲の向上を一層図るため、部活動はもちろん、インターンシップやボランティア活動など生徒の活動も重視することが必要であると考え、すべての教育活動の関連を図ることとした。

本事例のように、確かな学力の向上を図るためには、校内体制の整備を図るとともに、教員が指導力を高め、授業の充実を図り、生徒が意欲的に学習に取り組むなど、教員と生徒相互の望ましい関係を一層推進することが大切である。



次の実践例は、生徒による授業評価を実施し、その結果を授業改善に生かす取組の例である。「学力等実態調査」の結果等から生徒の学力の実態に係る課題を把握した上で、授業に対する教員の自己評価、教員相互による評価とあわせて、生徒による授業評価を導入し、課題解決のための具体的な方策を検討するなど、授業の評価を授業の改善に生かすことが大切である。

● C 圏域の推進校（D高等学校）における「生徒による授業評価」の実践例

【実施科目】 全学年 全教科

【ねらい】

- 生徒による授業評価を通じて、「わかる授業」「学習意欲を高める授業」の構築を図る。
- 教科ごと、学年ごとの授業評価を行うことで、より具体的に授業改善を進めるための基本的な資料の収集をすするとともに、緊張感のある授業環境を作り上げる。

【実施の手順】

- 実施日時：○月○日（△） 第○校時
- 実施内容：別紙
- 説明事項：HR担任から、回答の手順、趣旨の説明に加え、次の事項についても十分説明すること。
  - 生徒一人一人を、授業改善のための大切な評価者として尊重していること。
  - 授業改善・学力向上に向けての取組であるため、授業改善に結びつく率直な意見を期待していること
  - 生徒自身の学習態度等についても正確な回答を期待していること。
- 集計
  - 担任、副担任はクラスごとの集計を行い、学年の共有ファイルにある集計シートに入力する。
  - 教務部担当者は、学年ごと、教科ごとの数値及び意見・要望の集計を行う。
  - 教務部で全体の分析結果のまとめと、保護者用、生徒用の結果報告文書を作成する。

授業改善のためのアンケート 第（ ）学年 クラス（ ） 教科・科目名（ ）

本校では、学力向上を目指して様々な取組を行っています。今回実施する「授業評価」も、それらの取組の一環として行うものであり、その結果を参考にしよりよい授業づくりをしていきたいと考えています。授業改善に結びつく前向きな意見等を記入してください。なお、このアンケートは無記名で実施します。

I この授業を担当する先生の指導等について	II この授業に関するあなたの取組や要望等について
1 先生は挨拶、ベル席、遅刻、私語、居眠りなどの授業規律について <ol style="list-style-type: none"> <li>①指導を徹底している。</li> <li>②おおむね指導している。</li> <li>③あまり指導していない。</li> <li>④まったく指導していない。</li> </ol> 2 先生の教え方について <ol style="list-style-type: none"> <li>①とても分かりやすい。</li> <li>②おおむね分かりやすい。</li> <li>③やや分かりにくい。</li> <li>④わかりにくいことが多い。</li> </ol> 3 質問や相談について <ol style="list-style-type: none"> <li>①先生はとて丁寧に対応してくれる。</li> <li>②先生はやや丁寧に対応してくれる。</li> <li>③先生はあまり丁寧に対応してくれない。</li> <li>④先生はの対応は不親切だ。</li> </ol>	1 あなたの授業中の取組について <ol style="list-style-type: none"> <li>①常に積極的に臨んでいる。</li> <li>②ほぼ積極的に臨んでいる。</li> <li>③あまり積極的に臨んでいない。</li> <li>④まったく積極的に臨んでいない。</li> </ol> 2 あなたの家庭学習について <ol style="list-style-type: none"> <li>①予習も復習もしている。</li> <li>②予習をしている。</li> <li>③復習をしている。</li> <li>④予習も復習もしていない。</li> </ol> 3 授業で分からないことがあった場合 <ol style="list-style-type: none"> <li>①先生に質問する。</li> <li>②友達などに質問する。</li> <li>③自分で解決する。</li> <li>④そのままにしてしまう。</li> </ol>

## イ Scienceプロジェクト

次の実践例は、大学や研究機関等との連携により、地域の自然環境を生かした専門性の高い理数科教育を推進するプログラムの実践研究を通して、生徒の創造性・獨創性を育み、科学的に解釈する力を身に付けさせる取組の例である。

大学・研究機関等、学校外の機関との連携においては、目的を明確にし、連携先の担当者と十分話し合い、相互に理解し合った上で継続的に実施することが大切である。

### ● Scienceプロジェクト推進校（E高等学校）における大学や研究機関等との連携事業の実践例

- 1 大学との連携
  - (1) 旭川医科大学・実験体験講座  
「顕微鏡でみる生命のかたち—ラットのからだの組織めぐり」（4日間実施）  
（旭川医科大学教授・講師・本校出身の実験助手）
  - (2) 大学出前実験講座  
「タンパク質・DNA分析」（北海道教育大学旭川校教授）  
「積雪の構造と性質や、雪崩及び積雪時における地震災害について学ぶ」（新潟大学教授）
  - (3) 大学出前講演会  
「人間活動ともなう地球温暖化について」（北海道大学教授）
- 2 研究機関との連携 [旭川市科学館主催の講演会への参加]
  - 第1回「地震と津波」、第2回「受精—その神秘を探る」、第3回「太陽系の果てを探る—惑星はいくつあるのか」、第4回「ホモ・サピエンスの起源と拡散—南米ナスカ人も縄文人の親戚」  
（北海道大学教授、山形大学教授、国立天文台天文情報センター長、国立科学博物館人類研究部長）

## ウ Englishプロジェクト

次の事例は、2校の推進校と10校の推進協力校が連携し、「実践的コミュニケーション能力の育成とその評価」を共通テーマとして取り組んでいる実践研究の例である。プロジェクト会議においては、推進校と協力校12校が協力して、「訳読を中心としない授業実践」等を内容とする『実践事例集』を作成する予定である。

### ● Englishプロジェクトにおける推進校、推進協力校による実践研究の例

<実践研究の内容例>

#### 1 授業において、生徒が英語を用いる機会を多くするための指導方法の工夫・改善

- (1) 英文和訳を行わずに読解力を育成する。
- (2) ペア・ワークディスカッション、ショートスピーチ、プレゼンテーションソフトを用いた発表、エッセイライティングなどを積極的に取り入れ、生徒が学習した英語を使う機会を多くする。

#### 2 生徒の学ぶ意欲を高めるための評価方法の充実

- (1) ショートスピーチやプレゼンテーションソフト等の発表活動における生徒の相互評価を実施する。
- (2) 自己評価票を用いて生徒の学習の実現状況や改善すべき課題を的確に把握する。
- (3) 「関心・意欲・態度」やスピーキング能力等の評価方法を研究する。

<共通実践項目の例>

<訳読を中心としない授業展開>

- 1) Flash card
- 2) Listen to CD  
・Whispering ×2times (With Handout)  
・Overlapping
- 3) Round 1 Words&Phrases
- 4) Round 2 Sight Translation  
・Read & Look Up
- 5) Round 3 A-B Sheet Practice
- 6) Comprehension Check:  
・Question&Answer  
・True or False Question
- 7) Shadowing

<実践研究>

実践の共有

推進校

推進協力校

推進協力校

推進協力校

推進協力校

推進協力校

成果、課題の整理

実践事例集 の作成

学力向上推進事業においては、ア～ウで示したようなそれぞれのプロジェクトにおける実践的な研究の成果を、全道に広く普及することにより、各学校における学力向上に係る実践に役立てることをねらいとしている。

各学校においては、各プロジェクトにおける実践やアンケート等を参考に、それぞれの学力向上の取組に積極的に役立てていくことが大切である。

（参考：道教委のURLは、<http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp>）



### 3 キャリア教育の一層の充実

#### (1) キャリア教育の推進

キャリア教育は、平成11年12月中央教育審議会答申（以下、「中教審答申」という。）「初等中等教育と高等教育との接続の改善」で、その推進が提唱されて以降、国においては、「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進に関する調査研究」（平成13、14年）をはじめとして、モデル地域等の研究指定やキャリア教育推進フォーラムの開催等、キャリア教育に関連する様々な施策を進めてきている。また、昨年改正された教育基本法にも、児童生徒に勤労観・職業観を身に付けさせるキャリア教育の重要性に鑑み、教育の目標の一つとして、「職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養う」と、規定されたところである。

本道においても、これまで、キャリア教育推進地域や日本版デュアルシステム推進モデル地域の指定等の国の事業の指定を受けた実践研究や、本道の事業である「高等学校『北を活かす人づくり』推進事業」を活用した実践研究等に取り組み、その研究成果を全道に普及するとともに、昨年度の「高等学校教育課程編成・実施の手引」の「総則」に、キャリア教育が求められる背景や学校の全ての教育活動を通して行うキャリア教育の進め方等を示すなどして、各学校におけるキャリア教育の推進を図ってきている。

しかしながら、依然として、職業の選択や決定を先送りし、進路意識や目的意識が希薄なままに進学したり、せっかく就職しても長続きせずに早期に離職したり、安易にフリーターを選択したりする者が増えつつあることを背景に、若者の勤労観・職業観の未熟さや社会人・職業人としての基礎的資質・能力の低下が指摘されている。

このような中、中教審答申「新しい時代の義務教育を創造する」（平成17年）では、学習指導要領の見直しに当たって重視するものとして、「将来の職業や生活への見通しを与えるなど、学ぶことや働くこと、生きることの尊さを実感させる教育を充実し、学ぶ意欲を高めること」を挙げており、平成17年度からは、公立中学校で「キャリア・スタート・ウィーク」として職場体験の充実を図ってきていることなどを踏まえ、改正された教育基本法の趣旨に基づき、望ましい勤労観・職業観や、主体的に自己の進路を選択・決定できる能力などを身に付けられるよう、小学校・中学校・高等学校を通じた組織的、系統的なキャリア教育を、今後なお一層充実させることが求められている。

#### (2) 高等学校普通科におけるキャリア教育

##### ア 普通科におけるキャリア教育の重要性

普通科においては、学校と社会との接続の課題や、ニート、フリーターなどの増加等の現状を踏まえ、次のような視点から、キャリア教育を推進することが重要である。

- 大学や専門学校等への進学のための指導や就職等にかかる指導など、多岐にわたる指導が求められている中、進学や就職に関する希望をもつ生徒への指導は生徒一人一人の生き方にかかわる指導となることを認識し、生徒が将来への夢や希望をはぐくみ、その実現に生徒自ら努力することができるよう、これまで以上に充実した、キャリア教育の観点に立った指導・援助が必要である。
- 大学進学希望者に対しては、大学進学の意義を理解させ、生徒の将来における社会参加を視野に入れ、生徒一人一人が目的を持って勉学や諸活動に取り組むことが

できるよう、キャリア教育を進めることが必要である。

- 早期離職や、ニート、フリーターなどの増加等の課題を踏まえ、働くことの意義や大切さを理解させるとともに、働く意欲や態度を身に付けさせるなど、将来の社会的・職業的な自立に必要な意欲・態度や資質・能力を養うことが重要であり、積極的にキャリア教育に取り組むことが必要である。

#### イ キャリア教育の推進のための方策

普通科においては、キャリア教育の推進のため、次のような方策に取り組むことが大切である。

- ① 組織的・体系的なキャリア教育を進めるため、学校教育目標等にキャリア教育の推進を位置付け、指導計画を作成する。その際、指導方法とともに、評価方法を検討し、入学時から卒業時までの指導計画を体系化することが重要である。
- ② キャリア教育に係る校内体制を整備するため、全ての教職員を対象としたキャリア教育に関する研修を実施する。
- ③ 小・中・高・大の学校間・学校種間の連携を深め、それぞれの学校における教育活動に関する相互協力体制を整備する。
- ④ 産業界・関係機関・地域との連携を図るなどして、社会人講師等、外部人材を積極的に活用する。
- ⑤ インターンシップをはじめ、キャリア教育の充実に資する様々な体験活動を一層推進する。
- ⑥ 学校評価において、キャリア教育の評価を行い、指導計画の工夫改善を図る。

#### ウ 普通科におけるキャリア教育の進め方の具体例

##### ① 教育課程の工夫・改善

キャリア教育は、生徒のキャリア発達を支援する観点から、学校のすべての教育活動を通して推進されなければならない。そのため、例えば、次のような観点から、教育課程の工夫・改善を図ることが必要である。

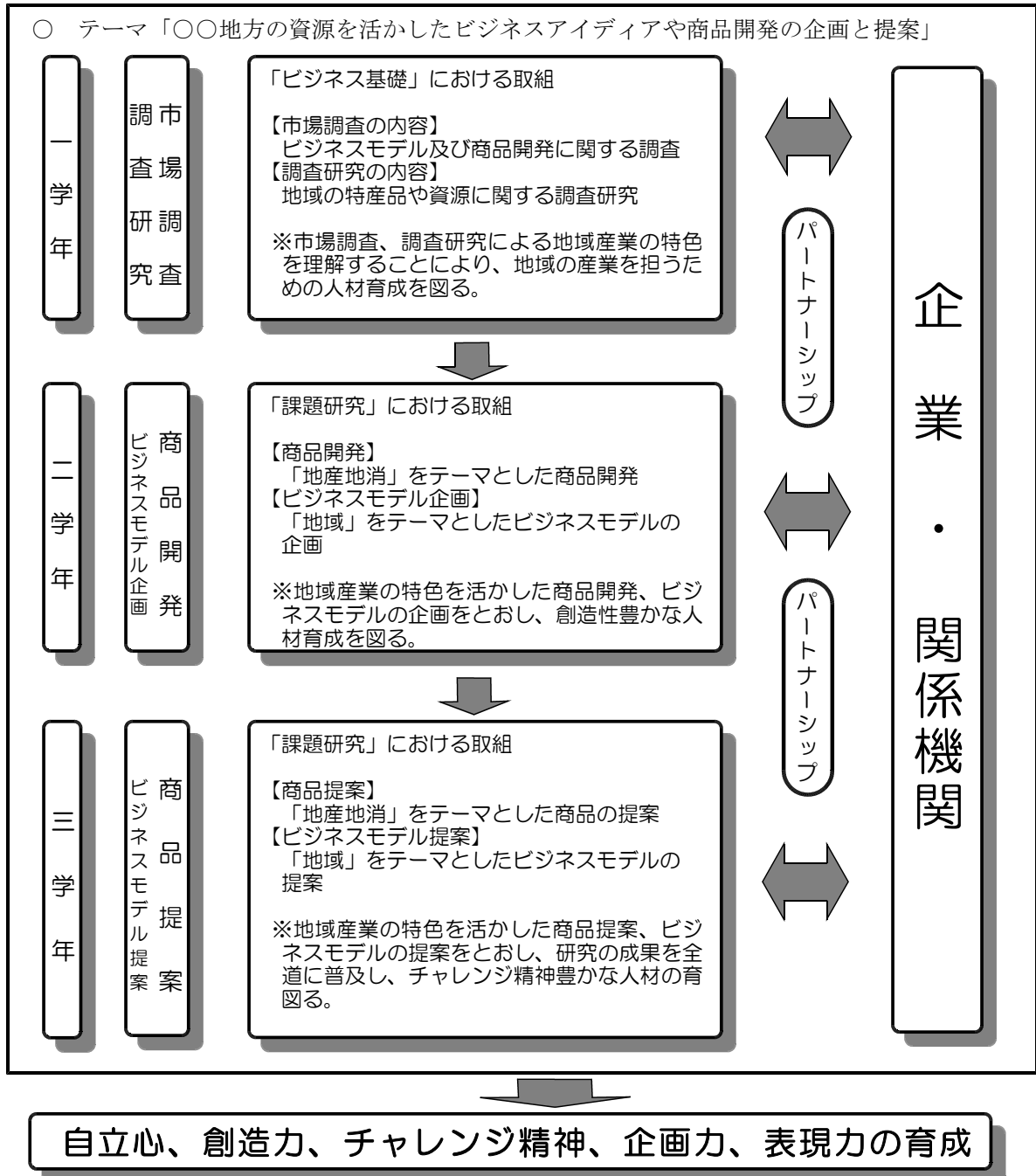
- 各教科、特別活動、総合的な学習の時間等の取組が、生徒のキャリア発達を支援する観点に立って、有機的に関連付けられているか。
- 生徒の発達段階や発達課題を踏まえた上で、具体的な活動計画が立てられ、全体として体系的な取組が展開できるようになっているか。
- 各学科における類型やコースが、各学校の生徒の実態や進路、学習ニーズ等に応じたものになっており、生徒が自己の将来を見通す中で、科目選択等を行うことができるような教育課程になっているか。
- ガイダンスやカウンセリングの機会は十分か。

##### ② キャリア教育の取組(例)

北海道においては、生徒一人一人のニーズに対応した特色ある高校づくりを進めてきており、特に、高等学校の職業教育においては、キャリア教育の充実が図られてきている。その成果の中から、普通科における今後の取組の参考として、高等学校『北を活かす人づくり』推進事業における「北を創る人づくり」での「アントレプレナーシップ教育」に取り組んでいるA高等学校情報ビジネス科の取組を示す。

この取組は、生徒が自己の目指す将来の職業やその分野に関する知識や技能を習得したり、具体的な情報を得たりすることを通し、必要な資質・能力をより深く自覚し、専門的な知識・技能をより高めようとする意欲や姿勢を身に付けさせるため、企業や関係機関等との連携を柱に、3年間を見通した教育活動となっている。

●A高等学校（情報ビジネス科）の取組



※ 各学校においては、地域の状況、生徒の実態を踏まえ、育てるべき生徒像を明確にして、組織的、系統的なキャリア教育が実施できるよう、教育課程を見直し、改善・充実を図ることが大切である。その際、特別活動や総合的な学習の時間、各教科等を有機的に関連付けた「キャリア教育の全体的な指導計画」を作成することが大切である。

#### 4 北海道公立高等学校平成19年度入学生教育課程編成の状況

##### ○資料1

「学校設定教科・科目」の設置状況（全日制・定時制）

	教科数	科目数	設置校数	設置学科数
平成19年度	25	495	202	305
平成18年度	25	511	192	283

※ 「教科数」は届出済教科のみ。「科目数」には届出予定科目を含む。

##### ○資料2

「学校外における学修の単位認定」の状況

	大学・高専等における学修	技能審査等の成果	ボランティア活動等の学修
全日制課程普通科	13校	50校	8校
全日制課程総合学科	3校	6校	2校
全日制課程専門学科	7校	46校	7校
定時制課程普通科	2校	16校	6校
定時制課程専門学科	1校	14校	2校

##### ○資料3

「類型を設定している学校（全日制）」の状況

	第1学年から	第2学年から	第3学年から
普通科	1校	61校	40校
専門学科	3校	24校	2校

##### ○資料4

「履修と修得を分離している学校」の状況

	全日制課程普通科	全日制課程総合学科	全日制課程専門学科	定時制課程普通科	定時制課程専門学科
校数	57校	10校	30校	10校	9校

##### ○資料5

「学期の区分ごとの単位修得の認定を行っている学校」の状況

	全日制課程普通科	全日制課程総合学科	全日制課程専門学科	定時制課程普通科	定時制課程専門学科
校数	26校	6校	9校	7校	7校

##### ○資料6

「2学期制を実施している学校」の状況

	平成19年度	平成18年度	平成17年度	平成16年度
全日制課程	197校	203校	198校	187校
定時制課程	39校	42校	41校	38校